

# 島のむんがたり

## 軍艦石のこころ

今は無き通称「軍艦石」は、もともとは「フナタイのタンジャ」（大名當の立岩）と呼ばれていたという。別称「アングシク（案川グシクの転化か）」とも。また、古者によると亀徳側からは「フーイシ（大石）」の呼称もあったという。

亀津東区の徳之島町体育センターと文化会館のある所に存在していた。

大名當（俗称船渡り）海岸に、東西に横たえたその雄姿はおよ



軍艦石（昭和36年）

そ30層、高さ4〜5階建てのビルに相当したであろうか。あたかも戦艦「アングシク号」を思わせるのに充分であった。かつて満潮時になると周囲が潮水に洗われ、いかにも軍艦が停泊しているような巨大な風化した珊瑚礁の岩であった。

徳富重成氏「シマの郷土文化」と小林正秀氏の「亀津の年中行事」を参考に、「軍艦石」の雄姿とそれにまつわる伝承を紹介してみたい。

それは軍艦石と「七日寝太郎（ななかねたろう）」物語である。

『ある男が7日間も目覚めずに軍艦石で寝続けたとのこと。よほどの睡眠不足がたたっていたのか、それとも疫病の災禍に襲われ寝込んだのかと憶測をしたのだが、伝えでは、暦が普及していなかった頃のこと、祖先祭（オヤホジムイ）や畦払い（アランダネイ）など年中行事の期日は役人が各村落を順番に回って通知していたと言われる。ある男が各部落への祖先祭の伝

達を言いつけられたが、島尻間切り（伊仙町）から亀津まで終えたら日が暮れ、亀徳との間にあった軍艦石で一夜を明かすはずであったが、深寝をしてしまい目覚めたら7日も寝たことに気づき、慌てふためいて秋徳（現在の亀徳）、和瀬（徳和瀬）の順にふれ回ったという次第。

現在なお亀徳川を境に亀徳以北は一週間遅れで祖先祭をするのは、前記の経緯に由来するとの伝承であるようだ。先祖祭の使いの途中、7日間寝たのでその男を「七日寝太郎」と言うようになったという。「祖先祭」の



亀津・亀徳の航空写真（昭和55年）

名称は、集落や個人によって異なるが、祖霊儀礼としての内容は共通している。』

由緒ある「軍艦石」は、経済成長の波に飲み込まれ、亀津海岸の埋め立て事業によって昭和58年にはその自然の雄姿を消してしまった。埋め立てによる除去については島内外の出身者から猛反発があったと聞いている。

また、当時の新聞記事によると「フナタイの軍艦石中心に公園を造り、周辺を掘り下げて海水が流入するようにして、熱帯魚の棲みかになれば素晴らしい名所になると思う。」という具体的な提言もあった。

岩の上部は青々と草木がしげりイソヒヨドリが美しい声で鳴っていた。徳之島が世界自然遺産となった今、当時の為政者たちは、あのすばらしい自然の景観を残したまま活かすという選択肢はなかったものかと大変残念に思う。

（町誌編さん室 岩下洋一）

問 郷土資料館  
☎0997-82-2908